

要 旨

本研究は、説明的文章の学習において、文章を図式化することを通して正確に読む力を高めることを目指したものである。文章を図式化する際、教材の特性に応じた言語活動を取り入れることが重要である。図鑑作りの表現方法の中から、文章の内容をベン図や流れ図に表現させることで、言葉に着目させていった。また、言葉レベルでの教材分析を行い、その結果を基に図式化させる活動を取り入れたことで、言葉のつながりをとらえやすくさせた。その際、すべての児童に自分の読みをもたせるために個に応じた手立てを取った。さらに、できた図を使って交流させたことで段落相互の関係をとらえさせ、正確に読む力を高めることができた。

キーワード 言語活動 図式化 個に応じた手立て

1 研究の目標

説明的文章の学習において、「表現を取り入れた」言語活動を通して、文章を正確に読む力を高める指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

平成17年度佐賀県小・中学校学習状況調査によると、「読むこと」の領域において全国通過率を下回っている。また、文部科学省から出されたPISA調査（読解力）の結果から明らかになった課題では「中位層の生徒が下位層にシフトしている」<sup>(1)</sup>とある。つまり、読む力に差ができたということが言える。さらに、日頃接している子どもたちの実態からも、図書を選択する際に、説明的文章を進んで読む児童が少なく、論理的に書かれた文章を読む力の差が大きいことが伺える。

これらの課題を解決するためには、児童が目的意識や必要感をもって意欲的に説明文を読む授業を仕組む必要があると考える。また、「表現を取り入れた」言語活動を行う中で、段落の内容や児童の能力に応じた表現方法を工夫しながら、文章を正確に読ませていくことが大切であると考えます。

そこで、本研究では、文と文の関係、段落と段落の関係を筋道立てて書かれた説明的文章を教材とし、児童の能力に応じた「表現を取り入れた」言語活動を行うことにより、主体的に学習に取り組ませ、また、必要に応じて細かい点に注意して読ませたり、文章の構成をとらえさせたりすることで、文章を正確に読む力を高めさせたいと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

説明的文章の学習において、段落の内容や児童の能力に応じて図やイラスト等に表現させれば、細部まで注意して読んだり、段落相互の関係をとらえたりすることができ、文章を正確に読む力が高まるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 説明的文章における「読むこと」の力と言語活動とのかかわりについての理論研究をする。
- (2) 授業実践（第3学年「すがたをかえる大豆」2時間、「もうどう犬の訓練」2時間）を行い、「読むこと」の力を高める指導方法について分析・考察する。

## 5 研究の実際

### (1) 文献による理論研究

説明的文章を正確に読むためには、必要に応じて細部まで読んだり、文章の構成をとらえたりする力が不可欠である。必要に応じて細部まで読んだり、文章の構成をとらえたりするとは、1つ1つの言葉の意味や使い方を考え、目的をもって書かれている内容を読み取っていくことであり、言葉や文のつながりを基に、事柄や内容相互の関係や段落相互の関係を理解することである。こういった力を効果的に付けるためには、教材の特性と身に付けさせたい言語能力を踏まえ、それに合った言語活動を行う必要がある。言語活動は、児童の意欲を持続させるとともに、読みの過程で文章の叙述に着目させるための手段として取り入れていくことが重要である。

植山俊宏は、説明的文章教材をその説明の手法と性格から、「事例列挙型」「事象変化型」「課題解明型」の3つに分類している。児童に文章を正確に読む力を付けさせるためには、3つの分類と身に付けさせたい言語能力を踏まえ、それに合った言語活動が必要であると考えた。

### (2) 研究の全体構想 ～教材の特性に応じた言語活動の効果的な取り入れ方について～

本研究では、文章を正確に読む力を段落相互の関係をとらえる力と考え、この力を高めるために次の3つの視点から手立てを取ることにする。(図1参照)

#### ア 教材の特性に応じた表現方法の設定(視点)

教材の特性に応じた表現方法を考えていく時に、言語能力との関連を図らなければならない。説明的文章で児童に身に付けさせたい主な言語能力として、学習指導要領に示された「読むこと」の内容から7項目を取り上げた。教材の特性については、植山氏の3つの分類を教科書教材と照らし合わせ、主に「事例列挙型」は第1学年、「事象変化型」は第2学年、「課題解明型」は第3学年から第6学年の教材文に当てはまると考えた。「表現を取り入れた」言語活動については、図鑑作りを取り上げた。

図鑑には、絵、図、表など、様々な表現方法を取り入れることができる。児童は文章の内容を図式化していくことで1つ1つの言葉に着目したり、言葉同士を関連付けたりすることができると思う。

次頁表1は、身に付けさせたい主な言語能力と教材の特性、図鑑作りにおける表現方法の関連をまとめたものである。

言語活動を効果的に取り入れるためには、その表現方法を使ってどんな力を付けさせるか、どういう言葉から何を読み取らせるのかという見通しを指導者がはっきりともち、教材分析を進めていくことが重要になってくる。この教材分析こそが、図鑑作りを単なる楽しい活動だけに終わらせず、「読むこと」の力が付く学習にするために大切なことであると考えます。

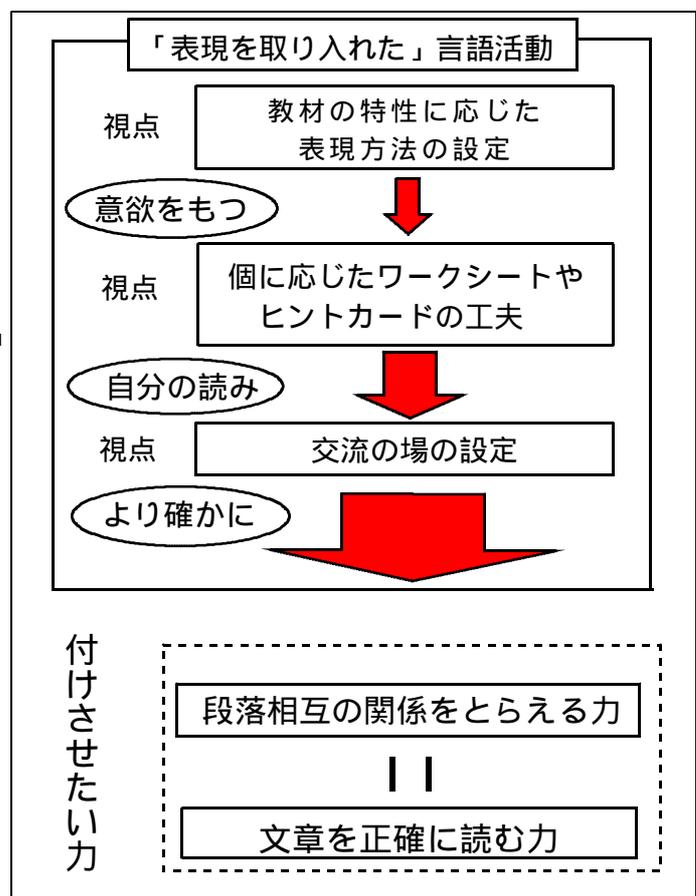


図1 文章を正確に読む力を高めるための手立て

表 1 言語能力，教材の特性，言語活動との関連（試案）

| 発達段階 | 教材の特性  | 言語能力   | 図鑑作りの表現方法例                  |
|------|--|--|-----------------------------|
| 低学年  | 事例列挙型  | (ア) 時間的な順序，事柄などを考えながら内容の大体を読むこと                    | 挿絵，クイズ，4コマ漫画など              |
| 中学年  | 事象変化型<br><br>課題解明型<br>(規模の大きくない問題的事象を小課題として設定するもの) | (イ) 目的に応じて，中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え，文章を正しく読むこと      | 流れ図，目次，漫画，ペン図， など           |
|      |  | (ウ) 目的に応じて内容を大きくまとめたり，必要なところは細かい点に注意しながら文章を読むこと    | 流れ図，挿絵（言葉を加えて），クイズ，漫画，ペン図など |
|      |  | (エ) 読み取った内容について自分の考えをまとめ，一人一人の感じ方について違いがあることに気付くこと | 説明書き，後書き，感想，流れ図，ペン図，漫画 など   |
| 高学年  | 課題解明型<br>(ある程度広範な問題的事象を網羅的にとらえ，大きな課題として設定するもの。)    | (オ) 目的や意図などに応じて，文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること           | 前書き，説明書き，目次など               |
|      |  | (カ) 書かれている内容について事象と感想，意見の関係を押さえ，自分の考えを明確にしながら読むこと  | 説明書き，後書き，感想など               |
|      |  | (キ) 必要な情報を得るために，効果的な読み方を工夫すること                     | 目次，索引 など                    |

イ 個に応じたワークシートやヒントカードの工夫（視点 ）

教材の特性に応じた言語活動を取り入れても，自分の読みをもてない児童が出てくることは十分考えられる。そこで，どの児童も自分の読みをもつことができるように，個に応じたワークシートやヒントカードを工夫することで，自分の読みをもたせるようにする。その際，どんなワークシートを使い，どのタイミングで，どんなヒントを与えるのかが重要である。

ウ 交流の場の設定（視点 ）

教材の特性に応じた言語活動を取り入れ，個に応じたワークシートやヒントカードを使ってもった自分の読みも，すべてが確かなものとは言えない。そこで，それぞれの読みを交流させる場を設けることで，より確かな読みにしていくことができると考える。

(3) 検証の視点について

段落相互の関係をとらえる力を高めるために，次の3つの視点から検証を行った。

- 教材の特性に応じた言語活動を取り入れる。
- 児童の実態に応じたワークシートやヒントカードの工夫をする。
- 読みを図式化した表現を基に考えを交流する場を設ける。

(4) 授業の実際

ア 授業実践について

- ・ 授業実践 （11月実施）単元名「大豆大図かんを作ろう」教材「すがたをかえる大豆」光村図書
- ・ 授業実践 （1月実施）単元名「もうどう犬早わかり図かんを作ろう」教材「もうどう犬の訓練」東京書籍

イ 視点 の考察

中学年で取り上げられている教材の特性は，表1に示すように，課題解明型であると言える。このような教材に図鑑作りを取り入れる際，表現方法として考えられるものは幾つかあるが，どの表現方法を使うのかを決定するためには，各教材の言葉レベルでの分析が必要になってくる。そこで，本研究で取り上げた教材「すがたをかえる大豆」(光村図書3下)，「もうどう犬の訓練」(東京書籍3下)について分析したことを次頁表2に示す。



## ウ 視点 の考察

教材の特性に応じた言語活動を取り入れただけでは、自分の読みがもてるようになるとは言えない。そこで、児童一人一人が自分の読みをもてるように、ワークシートやヒントカードの工夫を行った。ワークシートを作る際、教師が考えなければいけないことは、何を書かせたいのか、書かせたことでどんな力を付けさせたいのかを明確にしておくことである。また、児童が読み取っていく際に、児童がどんな言葉でつまづきそうなのかを言葉のレベルで分析しておくことも必要である。ベン図を取り上げた授業では、5つのキーワード「はたらく犬」「ペット」「もうどう犬」「訓練された犬」「けいさつ犬」を、文中の手掛かりになる言葉「も」「また」「なかま」「など」に着目して位置付けていった。「また」という言葉に気付かず「ペット」と「はたらく犬」を区別できない児童には、図5に示すように、枠の入ったヒントカードを使い自分の読みをもてるようにした。また、「はたらく犬」と「訓練された犬」の関係が分かる言葉「など」に気付かず、戸惑っている児童には、ポイントになっている言葉「訓練された犬」を書き込んだヒントカードを使い、自分の読みをもたせた。児童が読み落としがちな言葉を明確にしておいたため、どの児童にどんなヒントカードを与えるのか迷うことなく支援することができた。その結果、どの児童も自分の読みをもつことができた。

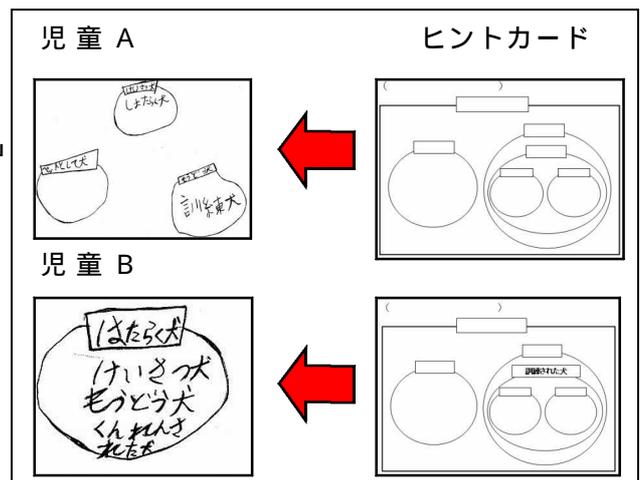


図5 ベン図のヒントカード

## エ 視点 の考察

図式化することによって自分の読みがもてたが、その読みが大まかな内容、経験や想像からきたものか、文中の言葉に裏付けされたものかは確かでない。そこで、互いの読みを交流させることによって、1人では気付かなかった1つ1つの言葉の意味や役割を理解させながら、段落相互の関係をとらえさせていった。

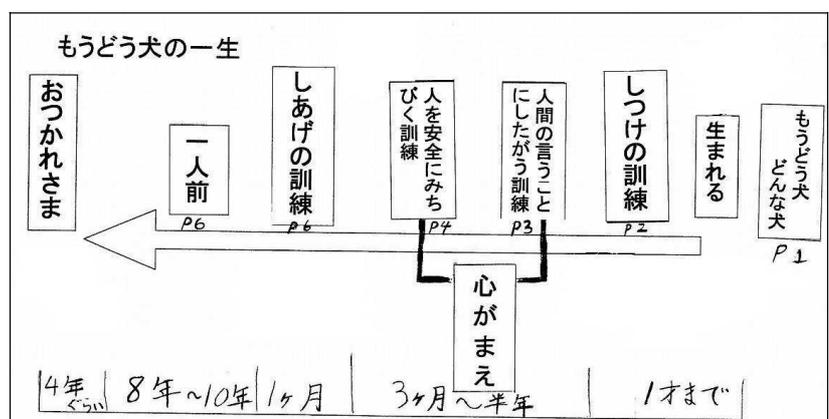


図6 流れ図で表したもうどう犬の一生

「もうどう犬の訓練」で、段落相互の関係をとらえていく場面では、5つの訓練(しつけ、人間の言うことに従う、人を安全に導く、心構え、仕上げ)を訓練されていく時間の順序で位置付けさせた。(図6参照)

児童は、「従う」訓練と「導く」訓練はどちらが先か、「心構え」の訓練はいつするのかなどといった視点をもって、1つずつ意見交換を行っていった。なぜその場所に位置付けたのか、「さいしょは」、「次は」という順番を表す言葉や「1才になると」、「生まれるとすぐに」など時間や期間に関する言葉に着目しながら確認していった。図6のように文章を図式化したことは、どこが違っているのかが目で見てすぐに分かり、意見を交換する際も効果的であった。話し合いの視点の中で、「心構え」の訓練の位置付けについては、自分の考えをもつ段階で正確に読み取っている児童はいなかった。文章に出てくる順番だけでは気付きにくいところであるが、流れ図として表現したことで、その位置付けが明確になった。児童の間からもみんな考えていくうちに疑問の声があがり、考えを交流

するきっかけになった。

児童は自分なりの根拠を文中から探し、どの位置に置く方がよいのかについて理由を述べながら、「心構え」が前の2つの訓練を通して行われるものだということに気付いていった。もうどう犬の一生を年表形式に表わすという「表現を取り入れた」言語活動によって、教師が学ばせたい学習内容を、児童が自然と求めていく授業になったと考える(表3参照)。

この授業実践により、p. 6表2のように教材を分析し、図式化することが児童の読み取りの活動に有効であったと考える。また、1つ1つの言葉のもつ意味や役割を考えさせたことにより、筆者の説明の仕方も学ばせることができたと考える。

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究の成果

説明的文章の学習において、文章を正確に読む力を付けさせるために、図式化する表現方法を取り入れたことで次のような成果があった。

ア 文章を読み取らせるだけの従来の授業において、言葉や文のつながりを把握させることは難しかった。そこで、文章をベン図や流れ図に図式化させることにより言葉のつながりを視覚的にとらえやすくした。その結果、キーワードをどこに位置付けるのかを文章の中の言葉に着目させながら考えさせることができた。このことから、言葉や文、段落間のつながりを読み取らせるために図式化させることは有効であったと言える。

イ 文章を図式化させる際に、自分の考えをもてない児童が出てくることが予想された。そこで、教材を1つ1つの言葉の意味や役割、効果まで分析した上で、児童のつまづきを予想し、ワークシートやヒントカードを作成した。その結果、ほとんどの児童に自分の読みをもたせることができた。

ウ 児童それぞれの読みは、もっている知識や体験からの読みであったり、文章の叙述を一部見逃している読みであったり、確かな読みとは言い難い。そこで、作った図を基に読みの結果を交流させる場を設けた。図にした根拠を出させていく中で、言葉の意味や役割が分かり、文章に戻って確認させることで、表現の効果に気付かせることができた。

### (2) 今後の課題

- ・ 図鑑作りの表現方法において、ベン図や流れ図についての有効性は確認することができたが、他の表現方法についても検証していく必要がある。

表3 「心構え」の位置付けについての交流の様子

|    |  |
|----|--|
| T  | ：「訓練を通して」って、「心構え」がどの場所に来るかが関係ありそうですね。                |
| C1 | ：仕上げの訓練の前！   |
| C2 | ：だって、心構えをやって仕上げでしょ。                                  |
| C3 | ：「さらに」って書いてあるから、仕上げの訓練が後にくるんじゃないのかな。                 |
| T  | ：どうですか？これでいいですか？                                     |
| C全 | ：うん。なっとくなっとく。  |
| T  | ：仕上げより前だってことは分かったね。                                  |
| T  | ：「通して」っていつするのか、考えてみようか。                              |
| T  | ：従う訓練と導く訓練が終わってから、心構えですか？                            |
| C全 | ：あっ、分かった。  |
| T  | ：心構えは、いつ教えるかってことですよね。                                |
| C4 | ：「通して」って、全部終わってからってこと？                               |
| C5 | ：安全に導く訓練の下かな？  |
| T  | ：じゃあ、従う訓練の時はしないんだね。                                  |
| C全 | ：違う！   |
| T  | ：じゃあ、どこからかな？   |
| C6 | ：分かった。「訓練を通して」っていうことは、「従う訓練」と「導く訓練」の間、ずっとってことじゃないかな。 |
| C7 | ：そうか。分かった。   |
| T  | ：心構えは厳しい訓練の間、ずっと訓練するんだね。                             |

## 《参考文献》

- ・ 倉澤 栄吉・野地 潤家監修 『朝倉国語教育講座 2読むことの教育』 2005年 朝倉書店